教育課程

育成を目指す資質・能力と学ぶ内容との関係を明確化する

教育課程に求められる「学びの地図」の役割

「教育課程」については、現行の学習指導要領では次のように定義されている。

> 教育課程は、各教科・科目、総合的な学習の時間及び特別活動についてそれらの目標を達成するために、教育の内容を学年ごとに、または学年の区分によらずに授業時数や単位数との関連において総合的に組織した学校の教育計画（「高等学校学習指導要領解説総則編」2009年7月　文部科学省）

中央教育審議会の次期学習指導要領に関する答申（＊）では、現行課程の現状について、「言語活動の導入により、思考力等の育成に一定の成果は得られつつあるものの、教育課程全体としてはなお、各教科等において『教員が何を教えるか』という観点を中心に組み立てられており、それぞれ教えるべき内容に関する記述を中心に、教科等の枠組みごとに知識や技能の内容に沿って順序立てて整理したものとなっている。そのため、一つ一つの学びが何のためか、どのような力を育むものかは明確ではない」と、指摘されている。

本誌4月号の特集でも解説した通り、次期学習指導要領では「社会に開かれた教育課程」の実現を、目指す基本理念としている。答申で示された「社会に開かれた教育課程」の3つの側面（**図1**）の②からも分かるように、教育課程それ自体に、学校教育を通じて育む「生きる力」とは何かを資質・能力として明確化し、「学びの地図」として生徒自身が学びの意義を自覚する手がかりを見いだすものとすることが求められている。また、教育課程編成の際には、教科等と教育課程全体の結びつきや、教育課程と資質・能力の関係を明らかにし、縦（学年間、学校段階間）と横（教科間）のつながりを意識することが求められる。

以上のことから、これからの教育課程編成上、必要な視点は次のようにまとめることができる。

視点①　育成を目指す資質・能力と学ぶ内容との関係（教育課程全体と教科等のつながり）の明確化

視点②　縦（学年間、学校段階間）と横（教科間）のつながり

学ぶ内容と育む資質・能力のつながりを明確化

そこで、VIEW21編集部では、右記の視点を踏まえた教育課程を具体化するために、現場の教師から様々な意見・アイデアをもらい、資質・能力と教科等で学ぶ内容とのつながりを明確化する教育課程表のモデル（**図2**）を作成した。これは、1つめの視点である「育成を目指す資質・能力と学ぶ内容との関係（教育課程全体と教科等のつながり）の明確化」の具現化を最も意識して作成したものである。そして、今回示した教育課程表のモデルは、教科・科目ごとに作成することを想定しているが、そうすることで、2つめの視点である「縦（学年間、学校段階

図1　「社会に開かれた教育課程」とは

❶社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。

❷これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。

❸教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

＊中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」を基に編集部で作成

＊中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」

図2 教育課程表のモデル

ダウンロード

（　　）高等学校　（　　）年度　第（　　）学年　【教科・科目】（　　）　教育課程表

資質・能力	資質・能力の説明	【教科・科目】（　　）【単位数】（　　）単位				
分野・単元・履修時期 ＼ 育成を目指す資質・能力						

学校教育目標として掲げた、育成を目指す資質・能力を記入。

左に記入した資質・能力を該当教科・科目で育成する場合、それがどのような力なのか、具体的に説明する。

各分野・単元で特にどの資質・能力を育成するのかを「◎」「○」などで示す。

図3 従来の教育課程表の一例

平成29（2017）年度　教育課程表

教科	科目	標準単位数	1年		2年				3年			
			普通科	理数科	普通科		理数科		普通科		理数科	
					文系	理系	文系	理系	文系	理系	文系	理系
国語	国語総合	4	5	5								
	国語表現	3							2			
	現代文B	4			3	2	2	2	2	2	2	2
	古典B	4			3	3	3	2	3	3	3	3
	世界史A	2	2				2	2				

間）と横（教科間）のつながり」を検討しやすくしている。例えば、各教科・科目の教育課程表を並べて見通すことで、「国語のこの単元を通じて伸ばしたい資質・能力と、日本史のこの単元で伸ばしたい資質・能力は共通しているので、近いタイミングで学べるようにしよう」といった工夫を見いだすことができる。

今回提示した教育課程表のモデルにも、その教科・科目を何単位で履修するかを示すようにしているが、総履修単位数が各教科・科目にどのように振り分けられるかがひと目で分かる従来の教育課程表（**図3**）も実務上、引き続き必要とされるであろう。したがって、これからは、今回示したような、育成を目指す資質・能力と各教科・科目で学ぶ内容との関係が明確化した教育課程表と、総履修単位数の振り分けを示した従来の教育課程表の大きく2つの形が求められるのではないかというのが、ヒアリングした現場の教師の共通した意見だ。

今回提示した教育課程表のモデルを活用するイメージが持てるよう、教育課程表のモデルの作成にあたってご意見・アイデアをいただいた教師の1人、広島県立尾道北高校の進路指導主事である三保光成先生に、先生の担当科目である日本史で教育課程表を実際に作成していただいた。次ページでその具体的な内容を見ていく。

ダウンロード　このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト（http://berd.benesse.jp）からダウンロードできます。「**HOME →教育情報→高校向け→バックナンバー→ 2017 年度 8 月号**」でご覧ください。

教育課程表 検討・作成実践

育成を目指す資質・能力と各単元の関係を考えることが、次の授業デザインにつながる

◎広島県立尾道北高校

5つの資質・能力の育成を目指す教育内容を検討

広島県では、コンピテンシー（資質・能力）の育成を目指した主体的な学びを促す教育活動を推進する「広島版『学びの変革』アクション・プラン」を2014年度に策定、18年度から全県的にコンピテンシー育成を展開する計画だ。17年度現在、県内24の高校が「学びの変革」のパイロット校に指定され、課題発見・解決学習を取り入れたモデルカリキュラムを作成し、取り組んでいる。

そのうち、広島県立尾道北高校は、「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）を中核に据えながら、教科学習を「習得と探究のサイクル」の観点から有機的に結びつけ、生徒の主体的な学びの深化を図る教育活動の研究と実践を「尾北イノベーション」と銘打ち、全校で取り組んでいる。

これについて、好村孝則校長は、「他者と協働して未来について思考し、社会に変革を起こすための手立てを提案・実行できる力を生徒に育むための学びの変革だ」と説明する。

「『尾北イノベーション』では、育成すべき資質・能力として『習得力』『思考力』『提案力』『実行力』、そして『メタ認知』の5つのコンピテンシーを定義しました（図1）。総合学習はもちろん、教科学習、『産業社会と人間』、LHRで、5つのコンピテンシーの育成を強く意識した教育活動が行われることになります」（好村校長）

広島県立尾道北高校校長
好村孝則 よしむら・たかのり
教職歴37年。同校に赴任して3年目。全国高等学校長協会副会長。

広島県立尾道北高校
三保光成 みほ・みつなり
教職歴27年。同校に赴任して10年目。進路指導主事。地理歴史・公民科主任。

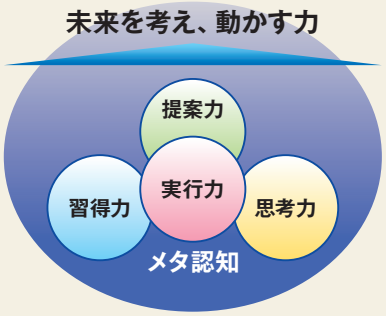
広島県立尾道北高校
◎校是を「至誠一貫」、校訓を「自尊・自恃・自制」とする。1998年度に総合学科に移行。2015年度に広島県「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」の「『学びの変革』パイロットスクール」のうち、「探究コアスクール支援事業」の指定を受ける。
◎設立　1925（大正14）年
◎形態　全日制／総合学科／共学
◎生徒数　1学年約200人
◎2017年度入試合格実績（現役のみ）
国公立大は、北海道大、東京大、京都大、大阪大、神戸大、広島大などに134人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ294人が合格。
◎URL　http://www.onomichikita-h.hiroshima-c.ed.jp/

生徒の主体性を尊重する「学びの地図」として

今回、VIEW21編集部作成の教育課程表のモデル（P.7図2）を使って、同校の「学びの変革」委員会の委員で地理歴史・公民科主任の三保光成先生に、同校で育成を目指す資質・能力と「日本史B」の学習内容との関係を整理していただいた（図2）。

「今回、生徒の学びを俯瞰する作業を通して改めて思ったのは、本校が育成を目指す5つのコンピテンシーはどれが上位でどれが下位といった順番のあるものではなく、すべてが関連し合いながら身についていくものだということです。作成した教育課程表を見ながら、『この単元において、個別の事象から概念、法則を導き出し、提案や実行へとつなげるような問いかけにはどのようなものがあるだろうか』と自問しました。教科団で授業について議論する材料にもなり、指導力の向上にも

図1　尾道北高校で育成する5つのコンピテンシー



尾道北高校では、「学びの変革」委員会を中心に、5つのコンピテンシーについて継続的に話し合いを続けている。既に、思考力については、すべての教科でその定義を明文化する作業をしているところだ。
＊学校資料を基に編集部で作成

図2 三保先生作成「日本史B」の教育課程表

（　広島県立尾道北　）高等学校　（平成29）年度　第（　　）学年　【教科・科目】（地理・歴史　日本史B）教育課程表

【教科・科目】（　地理・歴史　日本史B　）【単位数】（　　）単位

育成を目指す資質・能力 ＼ 分野・単元			(1) 原始・古代の日本と東アジア ア 歴史と資料 イ 日本文化の黎明と古代国家の形成 ウ 古代国家の推移と社会の変化	(2) 中世の日本と東アジア ア 歴史の解釈 イ 中世国家の形成 ウ 中世社会の展開	(3) 近世の日本と世界 ア 歴史の説明 イ 近世国家の形成 ウ 産業経済の発展と幕藩体制の変容	(4) 近代日本の形成と世界 ア 明治維新と立憲体制の成立 イ 国際関係の推移と立憲国家の展開 ウ 近代産業の発展と近代文化	(5) 両世界大戦期の日本と世界 ア 政党政治の発展と大衆社会の形成 イ 第一次世界大戦と日本の経済・社会 ウ 第二次世界大戦と日本	(6) 現代の日本と世界 ア 現代日本の政治と国際社会 イ 経済の発展と国民生活の変化 ウ 歴史の論述
資質・能力		資質・能力の説明						
習得力（基礎力）	知識 FACT	事実や過程についての知識 「いつ」、「どこで」、「誰が」、「何か」、「なぜか」、「どのようにしてか」などの事実や過程についての知識	完新世、磨製石器、三内丸山遺跡、土偶、竪穴住居、環濠集落、邪馬台国、古墳、乙巳の変、大宝律令、聖武天皇、東大寺大仏、万葉集、藤原北家、外戚	保元・平治の乱、日宋貿易、承久の乱、蒙古襲来、足利尊氏、明徳の乱、正長の徳政一揆、勘合貿易、分国法	織田信長、豊臣秀吉、太閤検地、朱印船貿易、関ヶ原の戦い、武家諸法度、徳川吉宗、享保の改革、田沼意次、株仲間、寛政の改革、ラクスマン、フェートン号事件	ペリー、日米和親条約、桜田門外の変、薩長連合、戊辰戦争、版籍奉還、徴兵令、地租改正、自由民権運動、西南戦争、松方正義、日清戦争、日露戦争、大阪紡績会社	第一次護憲運動、米騒動、日本農民組合、大戦景気、昭和恐慌、ロンドン海軍軍縮条約、幣原喜重郎、満州事変	五大改革指令、朝鮮戦争、サンフランシスコ平和条約、池田勇人、日中共同声明
	理論 THEORY	複数の事実や過程から導き出された法則性〔一般理論〕 「なぜか」、「どうなるか」、「何か」という「問い」に対して、そこから類似の他の事象も説明することができる一般理論	縄文時代 弥生時代 古墳時代 ヤマト政権 律令国家 摂関政治	荘園公領制 封建制度 鎌倉仏教 守護領国制	織豊政権 幕藩体制	明治維新 藩閥政治 立憲国家体制 大日本帝国憲法 産業革命	第一次世界大戦 政党政治 ワシントン体制 経済恐慌 太平洋戦争	日本国憲法 占領政策 冷戦体制 55年体制 高度経済成長 バブル経済
思考力	論理的思考力 LOGICAL Thinking	根拠をもとに、主張や結論を導き出す思考	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	批判的思考力 CRITICAL Thinking 判断力	他者や自分の考え・行為などを再考し、よりよい判断をする思考 「本当にそうなのか?」と疑問を持ち、自分で判断する思考	◎	◎	◎	◎	◎	◎
提案力	創造的思考力 CREATIVE Thinking	課題を発見し、その課題の原因と解決策を生み出す思考 どうすればよかったかを考え、生き方・あり方を考える思考	○	◎	◎	◎	◎	◎
	表現力 プレゼンテーション能力	自分で創造したことを、言語などで表現する力			◎		◎	○
実行力	調査・研究活動 フィールドワーク	自分で、客観的な資料を収集して実証したり、他の事例を調べようとしたりする態度、行動	◎	◎	○		◎	○
	行動力	歴史に学んで行動しようとする態度、行動	○	○	○	○	○	○

＊三保先生が作成した教育課程表を基に編集部で作成

つながると思います」（三保先生）

同校は既に学校教育目標として5つのコンピテンシーを定義しているが、それがなければ作業は難航しただろうと、三保先生は考える。

「学校教育目標が資質・能力ベースで明確に定まっていたことで、各教科・科目において育成を目指す資質・能力の定義もうまくいきました。自校で育てたい生徒像を構造化する道筋を考える上で、資質・能力ベースの学校教育目標は不可欠です」（三保先生）

難関大学志望者の多い同校では、各単元で保証すべき資質・能力として、習得力、思考力に◎が多く入った。提案力や実行力については、生徒自身の興味・関心、さらに目指す進路によって変わってよいと好村校長は考える。

「学校として学びの土台は築きながら、その上に生徒一人ひとりが自分のカリキュラムを完成させることで、より主体的な学びが実現するはずです。生徒が描いた多様な『学びの地図』を教師が認め、違いを楽しむことで、学校の教育目標に向かった生徒主体の授業がデザインできると思います」（好村校長）